

# NIPPON



49号



日本製紙

発行所 東京都千代田区一ツ橋一丁目2番2号 〒100-0003 日本製紙株式会社新聞営業本部 電話 03-6665-1030 FAX 03-3217-3161 www.np-g.com/ newsprint@np-g.com ©日本製紙株式会社2011



## 新春 新聞営業本部長 藤崎夏夫 新年のご挨拶 子供新聞発行の思い出

新年、明けましておめでとうございます。日頃新聞社の皆様には大変お世話になり、心より感謝を申し上げます。本年もよろしくお願い致します。年頭のご挨拶にあたり、子供新聞発行の思い出と題し、昭和30年代後半、私が小学校高学年だった頃の新聞とかかわりについてお話ししたいと思います。折しも東京タワーが完成して大きな話題となり、また東京オリンピックに向け世の中が活気にあふれてきつつある時代でありました。東京スカイツリーが500mを超える今、仕事として新聞に日々接していると、あの当時の記憶が断片的ではありますがフラッシュバックのように思い出されます。

### 編集から製作まで

#### 1人で敢行

何がきっかけで始めたかは今では定かでないが、おそらく夏休みの自由研究か宿題の延長であったと思う。自分の主張や情報をクラスみんなに伝えることが無性にしたくなって、編集兼製作印刷発行をたった1人でやる個人新聞(子供新聞)を始めたのである。

その当時、毎日小学生新聞を購読していたことや、父親がアルバイトで印刷用原稿を書いていたことも引き金になった。家には謄写版の蠟引き原紙や鉄筆、ヤスリ板、茶色い修正液などの一式があって、見よう見まねで新聞らしき体裁の原稿を作ることが出来た。当時は学校のプリントや試験用紙は各教師が自ら謄写版印刷で作っていたので、学校には謄写版印刷の一式があった。わら半紙(更)、インクはちゃっかり学校の物を使用、B4判縦2頁のフォーマットで発行を始めたのである。

自分なりにこれは重要だなと思う話題は大きな見出しをつけたり、箸休めに4コマ漫画を配したりと、気ままに月2~3回発行、約1年続けた。父親の書き方

を脇から見ながら、升目一杯に文字を四角く大きさを揃えて出来るだけ活字らしく見えるようにしたり、筆圧も気を抜かないよう鉄筆の先端の蠟を取り除きながら書くことも学んだ。下敷きのヤスリ板も蠟が目が詰まってくるので、布にシンナーを含ませて時々ふいてやらなければならない。ヤスリ板も目の細かいものと粗いものが両面セットになっていて、細かい字やベタで塗りつぶす時に使い分けないと、蠟引きの薄い原紙に穴が開いてしまう。面白半分始めた子供新聞といえども、記事の編集、製作に追われて発行し続けることの難しさも味わった。

#### 自分の考えを発信し コミュニケーションの 大切さを学ぶ

原紙を書くテクニックはさておきながら、やはり何が楽しいかといつて自分の主張が発信出来る、みんなの知らないことを知らせられる、自由にレイアウト出来る、そして反応が返ってくる、また難しい字も覚えられる、といった点が自分にとっては満足するところであり、発行を継続する動機付けとなった。

(2ページに続く)

ART 製紙工場百景  
photographer 新聞営業部 雷井美夏  
12ページ



時には遊びの計画を発表してメンバーを募ったり、クイズを載せて適当に集めていたグッズを賞品にしたりと、はた目には煩わしい奴だ思う級友もいたかもしれないが、おおむね歓迎され先生達からの評判も良かった。

個人名が新聞まがいな何人かが面白がって読んでくれる、中には家に持ち帰ってくれる人もいた。当時家庭では広告の裏が大事なメモ用紙という時代だったから、学校の先生が目をつむってくれたことも大きい。表現の場としての新聞から得られたことは、まさに小学生である自分には貴重な財産だったと思う。まさ

か、後年この新聞にかかわる仕事に就くとは思ってもよらないことであった。そして現在、当時貴重だった紙をたくさん供給する立場となった訳である。

#### NIE実践活動の 更なる発展を熱望

小さい頃から新聞を読んでいると、字を覚えられる、物事を考える習慣がつく、自分の意見を持ち発信出来る、周りの仲間とコミュニケーション出来るなどの利点が大いにあるだろう。

(財)日本新聞教育文化財団(新聞財団)がNIE実践活動を推進している。NIE活動は、1930年代にアメリカで始まり、日本では1985年から新聞界と教育界が協力し合い、社会性豊かな青

少年の育成や活字文化と民主主義社会の発展などを目的に掲げ、全国で展開している。当初東京都内の3校でスタートしたが、2010年度全国で533校がNIE実践指定校となり、その目的達成のため日々積極的に取り組んでいる。

新聞財団の2009年度NIE効果測定調査報告の中に、興味深いデータがある。NIE実践後、児童・生徒共に閲読頻度が増加しており、「ほとんど読まない」が逆に大幅に減少した。特に小学生において顕著に現れている。閲読習慣も、約75%の教師が「新聞を読むようになった」と回答し、変化を実感しているようだ。情報源として利用しているも



のは、TV・新聞・インターネットが多く、実践前後を比較すると新聞からの情報入手割合が増え、新聞の有効性が認知されたことが明らかである。更に会話の頻度も新聞記事を話題にする機会が確実に増え、また会話の相手も家族中心から、家族及び友人へと広がっている。

これらの結果から、学校教育での新聞の活用が「他

人の意見を聞く」「自分で調べて詳しく知る」「友人の考えを吸収し自身の考え方と比較する」など、教育全般に有益であると考えられる。このNIE活動が、サッカーでのユースや野球のリトルリーグのように、若い内から新聞に慣れ親しみ、次世代の人材育成に一層力を発揮していくことを願ってやまない。

## 現役男子最年少プロ棋士 「一力 遼さん」来社

昨年7月の日本棋院の夏季棋士採用試験で総合成績1位となり、囲碁のプロ棋士に合格した一力遼さん(13)が来社され、芳賀社長を表敬訪問されました。

仙台出身の中学1年生、現役男子最年少プロとして9月にはプロデビューを果たされました。お名前を見てお気付きの方もいらっしゃるでしょう。河北新報社一力雅彦社長様のご息様です。

囲碁を始めたのは5歳の時。お父様(一力雅彦社長)とのオセロを手始めに囲碁の手ほどきを受け、あつという間に囲碁が大好きなおじいちゃん(一力一夫社主)を追い抜きました。仙台市内の道場に通い、河北少年少女囲碁大会などで優勝を重ね、小学2年の時、指導に来ていた宋光復九段の勧めで日本棋院の「院生」となりました。

仙台的小学校に通学ながら、週末には上京し院生として1日8時間の対局を行うという、大

人でも音を立ててしまおうな生活に「小さくて夢中だった。ただ、やるほど面白くて奥が深く、負けると悔しくてよく泣いた」と振り返る遼さん。2008年にはプロ棋士を目指し覚悟を決め東京に転校。学業と囲碁修行の両立に邁進する日々。「厳しい院生の上位クラスになって『プロ意識』が芽生え、対局の心構えを学びました」と。めきめきと力を伸ばし、同年中国で開催された応昌期ワールドユース大会・少年組では準優勝。日本人では17年ぶりの快挙でした。国際大会で中国、韓国の棋士になかなか勝てなくなった日本棋士界で「将来、世界と戦える人材」と期待されています。



10月に開催された第4回幽玄杯では、河野臨九段を相手に黒番半目勝ちと大物ぶりを発揮する金星を飾り、今や中国、韓国に対局の場を広げタイトル戦への挑戦が始まっています。

「おめでとう。世界を目指してがんばってください」と芳賀社長のお祝いと激励の言葉に、初々しいスーツ姿で、はにかみながら応える遼さん。まだ13歳のあどけない表情にも、世界を見据えたその瞳はキラキラと輝いていました。羽ばたけ一力遼プロ。

掲載日:2010年06月28日 (C) 河北新報社

中1 囲碁プロ棋士に  
一力君 現役男子で最年少  
仙台出身初

日本棋院の夏季棋士採用試験で総合成績1位となり、囲碁のプロ棋士に合格した一力遼さん(13)が来社され、芳賀社長を表敬訪問されました。仙台出身の中学1年生、現役男子最年少プロとして9月にはプロデビューを果たされました。お名前を見てお気付きの方もいらっしゃるでしょう。河北新報社一力雅彦社長様のご息様です。囲碁を始めたのは5歳の時。お父様(一力雅彦社長)とのオセロを手始めに囲碁の手ほどきを受け、あつという間に囲碁が大好きなおじいちゃん(一力一夫社主)を追い抜きました。仙台市内の道場に通い、河北少年少女囲碁大会などで優勝を重ね、小学2年の時、指導に来ていた宋光復九段の勧めで日本棋院の「院生」となりました。仙台的小学校に通学ながら、週末には上京し院生として1日8時間の対局を行うという、大

## 一橋一丁 いっしょういっしょう

息子の小学校の運動会、地区対抗リレーのメンバーに選ばれ走ること。リレーで走るなんて高校以来である。自分の順番を待つ間、他のお父さん達の走りを見ていると、足がもつれる人、転んでヘッドスライディングしている人、かなり面白いことになっている。◆走ることには少々自信があった、まだまだ走れる。自分がさっそうと走る姿をイメージしてバトンを受け取り走り出したが、その直後そんなイメージは全く吹き飛んでしまった。足は空回り状態、前に進まない、バトンを渡す直前には足がつり、転倒寸前。イメージとは程遠い結果となった。◆自分が思っていた以上に衰えた体力にショックを受け、日ごろの不摂生と運動不足を反省しつつ、来年は出番があるかわからない運動会に向け、息子に自慢できる走りをイメージして日々トレーニングに励んでいる。(O)

# 第52回九州新聞用紙品質会議

開催日/2010年10月7日(木)

参加社/佐賀新聞社、沖縄タイムス社、大分合同新聞社

南日本新聞社、熊本日日新聞社、長崎新聞社(新聞社19名、当社17名)

◆開催地は、いで湯と陶芸のふるさと  
佐賀県武雄市

九州県紙の皆様と共に歩み、八代工場の新聞用紙品質向上の支えとなってきたこの会議の開催地は佐賀県。会場の武雄温泉は、佐賀市より車で西へ約40kmに位置し、嬉野温泉と並び佐賀県の代表的な温泉地です。ぬめりのあるお湯は、訪れた人の体のみならず心を癒し、また有田市にかけては窯元も多く一大陶磁器の里としても有名です。当日も陶器を焼き上げる窯のごとく、熱気に満ちた会議となりました。新聞社の皆様からの暖かくも厳しいご意見そして充実した会議内容は、今後の八代工場の糧となり、皆様へ高品質な新聞用紙をお届け出来るものと思っております。

◆更なる品質の安定へ

会議は今春稼働を目指し新輪転機更新の最中にもかかわらず多大なるご協力を頂きました幹事会社、佐賀新聞社取締役執行役員編制局長の



佐賀新聞社幹事会社  
志浦恒美取締役執行役員編制局長



吉浦恒美様ごあいさつで幕を開けました。始めに当社新聞営業本部長代理の中川より、国内の新聞用紙需要動向並びに当社を取り巻く状況として原燃料価格の高騰にも触れ、厳しい現状と今後の見通しについてご説明させて頂きました。引き続き講演テーマとして、当社八代工場長代理の音羽より「製紙原材料動向」、八代工場技術室長の市川から「技術継承について」と題し八代工場の取り組みをご紹介させて頂きました。

休憩を挟み、九州営業支社主席技術調査役の藤田の司会で、各新聞者様での使用状況確認、事前アンケートの結果をもとに各新聞社様の間でディスカッションが始まりました。更に給紙部でのシワ入り、紙質要因と輪転機使用条件に

ついて発生のメカニズム・対策方法につきまして、各社様より貴重なお話を伺うことが出来ました。

◆次回は沖縄での開催

来年度は美しい自然に囲まれた美ら島「沖縄」で開催することとなりますが、今回の会議で頂きました貴重なご意見ご要望に対して誠実に取り組んでいき、今後も安心してご愛顧頂ける製品造りに邁進していく所存です。最後になりましたが、参加新聞社様の多大なるご支援ご協力に改めて感謝申し上げますとともに、幹事会社としてご尽力頂きました佐賀新聞社様に、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。



## 第26回 NAHAマラソン

2010.12.05 SUN

「太陽と海とジョガーの祭典」第26回NAHAマラソン(沖縄タイムス社他主催)が昨年12月5日(日)那覇市内及び南部地域を走る42.195kmのフルマラソンで行われました。年を追うごとに人気を博しているこの大会、今回からは人数制限が設けられ23,402名のジョガーが走りました。当社からはマラソンに慣れたベテランや初参加者など12名(本社・九州営業支社・八代工場・関連企業)が参加し、12月とは思えない日差しが照りつける那覇市を疾走しました。

九州営業支社 伊藤 翔



マラソンという名の祭り

一般的に言って、マラソンは長く苦しいものだと想像しがちですが、このNAHAに限るとマラソンというより祭りに近いものだと思います。沿道ではスタートからゴールまで途切れること無く地元の人が声援を送り、中には踊りや歌で応援してくれる人もいました。ジョガーもそれに負けじと某戦場カメラマンのお面をかぶったり、サンタの衣装を着たりと仮装で盛り上げていました。双方がマラソンを楽しもうとする気概が伝わって来て、私も自然と力をもらえました。

当社選手団の結果

最高気温25℃に迫る暑さの中、12名のうち11名が完



同期の中嶋くん(左)伊藤(右)

走という素晴らしい結果を残すことが出来ました。その内の1名は2時間43分43秒で14位と全参加者の中でも指折りの速さでした。完走出来なかった1名も初参加でありながら、30km付近まで走りきりました。

第27回大会に向けて

私事ですが、マラソン初参加でしたが無事に完走することが出来ました。よく走り終わった後は達成感が

湧いてくると言われますが「疲れた～」というのがレース後の率直な感想でした。しかし、数日たつと「あの坂はもっと早く走れた」「水をこまめにとるべきだった」などいろいろ反省点が浮かび、次回もチャレンジしたい気持ちがふつふつと湧いてきました。次回は上司のタイムを破れるようにがんばりたいと思います。

# G<sup>2</sup>PS GOOD PROPOSAL! GOOD SUGGESTION!

## 書道とコミュニケーション 「文字を通して伝える」

本格的に書道を始めてから早8年がたとうとしている。社会人になって筆を持つ時間は減ってしまったものの、それでも自分の生活とは切っても切れないものであることに変わりはない。始めた当初は、字が丁寧に書ければ良いという程度にしか考えていなかったが、それだけではここまで続けられなかったと思う。では、今の自分にとって書道の価値とは何なのか。今回はコミュニケーションという視点から考察してみた。

新聞営業本部新聞営業部 小川 貴之



デジタル時代におけるアナログ「筆文字」

一般家庭へのパソコンの普及・ソフトウェアの進歩により誰でも手軽にデザイン編集が出来る環境となった今日であるが、裏を返せば他との差別化が難しい時代になったとも言える。かわら版読者の皆様の中にも、年賀状をパソコンで作成する際、どんなデザインにすれば良いか悩んだ方がいるのではないかと思います。

そんな時代のなか、パソコンに格納されているフォントでは表現出来ない手作り感とオリジナリティを持ち、そして何よりも「決して同じものが2つとは書けない」というアナログならではの面白さが評価され、筆文字が活躍の場を大きく広げている。昔から新聞の題字や老舗百貨店の看板などで筆文字は多く使われていたが、最近では、食品や飲料、飲食店や旅館の看板、ファッション、インテリア、テレビ番組のタイトルなど、あらゆる場所・場面に筆文字が見られるようになってきた。日本製紙グループの日本製紙クレシア(株)から発売中の最高級ティッシュである「羽衣」のパッケージに書かれた筆文字も、NHK大河ドラマ「天地人」のタイトル題字を手がけた武田双雲氏によるものである。古典芸能としての観点からは必ずしも賞賛されるには限らないものの、こういった商業書道の存在感は日増しに高まってきている。

“書道”と“習字”の違い

ところで、この頁に目を止めてくださった方にはぜひとも“書道”と“習字”の違いを知って頂きたい。どちらも筆を持って字を書くことには変わりはないため、一般的には同義語として扱われていることが多いからだ。

“習字”とは、文字を丁寧に綺麗に、読みやすく書く訓練である。小中学校の授業で習ったり、習字教室に通われた方もいるだろう。そして、ここで「習字なんて嫌いだ!」と思い、ひいては書道という文化を敬遠する方も多いのではなかろうか。

では、“書道”はどうだろうか。“習字”との決定的な違いは、最終的に手本に頼らずに自分を表現するという点である。読みやすいように行列を整頓させ構成美を追求した作風もあれば、日本が誇

る文化である仮名文字のように流麗さと繊細さを併せ持つもの、一見すると本当に文字なのか判別出来ない程に墨をまき散らしている狂気じみたものまで、その様式は多種多様であるが、どんな形であれ書き手の精神を伝達するための手段なのである。

手間を惜しまないこと

筆文字の話に戻るが、重要なのは、手書きであれば何でも良いということではないということである。あまりに乱雑で粗野な字は、かえって商品やクライアントのブランドイメージを低下させることになる。書道においては、古典の模倣(これを臨書と言ってお手本の真似をすること)によって培われる技術は無論、筆・墨・紙を始めとする用具の選定から、書き手の肉体的・精神的状態、周囲の環境など、ありとあらゆるものが書きぶりに反映される。なかでも商業書道に関して言えば、その書きぶりがクライアントの利益につながることを要求されるため、その責任は重い。決して手間を惜しんではならないのだ。

そして、手間を惜しんではならないのは特に書道に限った話ではないと思う。人から人へ伝えること、すなわちコミュニケーションはこの考え方が例外なく当てはまると思う。直接対面しての会話だけでなく、電話やメール、さらにはブログやツイッターのようなインターネット上

でのコミュニケーションサービスなど、情報を発信する手段が多数存在する時代だが、何を選択するにせよ、手間を惜しむが故に情報を包む言葉が乱雑になったりしていないだろうか。筆者自身、常に心の片隅に置いておかねば思っている。



書道はコミュニケーション

書道は、文字本来の機能である“記録”と“伝達”のうち、“伝達”の部分を芸術として昇華させ、さらに“魅了”という機能を付加する作業と考えることが出来る。本来別の用途に使用するツールを基にしたという、珍しい成り立ちを持っている。その成り立ちから考えて、鑑賞者=コミュニケーションにおける情報の受け手=が存在するという本質を決して忘れてはならない。自己満足ではなく、鑑賞者に筆文字を通して情報を受信させ、共感、感化といったような感情を想起させなくてはならない。個人的には、書道の要件とは鑑賞者とのコミュニケーションが成立することであると考えている。

筆者にとって書道の価値は、精神修養だけでなく、文字を通した自己表現や趣味を同じくする仲間や自分の作品を見てくれる人とのコミュニケーションの輪の広がりである。まだまだ拙筆であり、しかも独学のため歩みも遅いが、これからも書道を通して「手間を惜しまず本当に大事なことを伝える」という行為を重ねていきたい。そして、その姿勢が仕事を始めとした実生活に還元されるよう心掛けたいものである。

